

「在日」を考える 終刊号を迎えて

尹健次



二〇一五年九月に創刊号を出した在日総合誌『抗路』は、今号、第一二号をもって終刊となる。一〇年間続いたこととなるが、その終刊号の特集は『在日』にとって境界とは」である。第五〇号まで続いた雑誌『季刊三千里』の終刊号（一九八七年五月）で歴史学者の姜在彦は、近年「定住外国人」という概念が次第に定着してきたと書いている。つまり「在日朝鮮人」は明治期以来の「アイヌ系日本人」とか、戦後とりわけサンフランシスコ講和条約以降に日本国籍を取得した「朝鮮系日本人」「中国系日本人」とは根本的に異質で、韓国籍なり朝鮮籍を固守して、祖国を精神的ルーツとして生きている外国人集団であり、その生き方はおそらく旧宗主国に在留する旧植民地民族の生き方として、

世界的な新しい実験となるのではなからうか、という。朝鮮人であるがまさに本名を使い、母国語をはじめとする民族的素養を身につける努力が必要であると強調している。ちなみに一九八五年当時、朝鮮人同士の婚姻数は二八・〇パーセント、日本人との婚姻数は七一・六パーセントであり、帰化した在日同胞の累計数は一四万であったという。マイノリティとか定住外国人、アイデンティティ、そして帰化といった問題は雑誌『抗路』でもつねに意識されてきたことで、その根底には被植民地支配の所産である「在日朝鮮人」とか「在日」とはいったい何か、という根本的な問いかけが常にあった。「在日」の定義がいつも重要な問いかけであったということにもなるが、実際には、『抗路』の終刊号に至る過程では、「在日」が何かを定義することは難しいという理解がかなり深まっていったと言つてよい。

帰化者の増加、ニューカマーの増大、日本国籍者との婚姻増加・その間に生まれたダブルの子たちの増加など、「在日」の外縁は増大するばかりで、なかには「在日社会」なるものはいまや存在しない、という主張も少なからず表れた。そうした中では、当然、先に姜在彦が述べていた、祖国を精神的ルーツとしながら、朝鮮人であるがまさに本名を使い、母国語をはじめとする民族的素養を身につける努力が必要だ、という主張は、二〇二〇年代に入った今日では、かなりの程度実感を伴わないものになっていると考ええてよい。一九八四年当時、在日朝鮮人の総数は約六七万人で、そのうち朝鮮籍が約二五万人、韓国籍が約四二万人であった。一九九一年には韓国籍、朝鮮籍を問わず、「平和条約国籍離脱者」には特例永住許可が与えられる制度が制定され、戦前からの居住者およびその子孫は「特別永住者」として処遇されることになった。一九九四年現在では、韓国籍・朝鮮籍特別永住者は五八万人を切り、解放後からの帰化者は約一九万人にのぼった。ちなみに二〇二三年六月現在、日本在留外国人のうち、韓国籍は四一万人、朝鮮籍は二・五万人である。「在日」のうち「特別永住者」が約二八万人であるということからすると、韓国籍のうち約一五万人がニューカマーだと考えていいのではなからうか。その意味では特別永住者はオールドカマーということになるが、これまでは概ね、このオールドカマーが「在日」とい

う言葉のコアの部分をなすというイメージを持つてきたと言える。特別永住者、オールドカマーが三〇年間で約三〇万人減っているが、これは帰化者の増大、およびいまや九〇パーセントくらいとも言われる「在日」の日本人との婚姻増大、そしてその間に生まれたダブルの子たちが日本国籍を選択していくのが主たる要因ではないかと推測される。特別永住者をはじめ、ニューカマー、帰化者、ダブルの日本国籍者など、「朝鮮半島出身」の「出自」を共有する集団的記憶をどう究めていけるのか、事はそう簡単ではない。『抗路』創刊号の巻頭論文（拙稿）「七〇年と五〇年、歴史の節目で——ある『在日』の想い」を久しぶりに読み返してみたが、「在日」の置かれていた今日の状況が一〇年前と大差ないことが感じ取れる。『抗路』創刊号の内容はそのまま、今回の終刊号の内容につながり、重なるものだとも言える。日本と南北朝鮮の民族・祖国・歴史そして民主主義のあり方、過去および現在の生活の実相、歴史意識のありようなどを中心に「在日」を論じ、一見、何の進歩も発展もなかったのではないかとも思える。しかし編集責任を担ってきた者の立場でみれば、それでも、それなりの変化があったと思われる。若い世代や韓国・アメリカその他海外の執筆者が多くなり、ジェンダー平等そして高齢者への関心が増えていった。日本人の執筆者も多く、また女性による執筆がかなり多かった。



「在日」は戦後日本と朝鮮の南北分断に大きく規定されてきた。そうした中で、私は、日本人が民族や国家に触れて語ると、何か不快感を持ってしまうことがある。今なお植民地主義から脱しきれない日本人には、できれば民族や国家については語って欲しくない、咄嗟に反応してしまうのかも知れない。しかしだからといって、日本人が民族や国家について常に全部否定すればよいと言うわけにはいかない気もする。脱植民地の統一国家も持てない現実において、「在日」は国家の存在、ありようをそう簡単に全部否定してしまおうわけにはいかない、という想いに囚われる。たぶん人は、困難に直面し、あるいは辛さに耐える力がなくなると集合名詞の「民族」を思いだし、それで自分を救おうという方向に走ろうとするのかも知れないが、それは冷静に考えると自分に都合の良い、甘えなのかも知れない。日本人もそうだし、「在日」もそうなのかも知れない。

高齢になってからいろいろなことを考える。生きるための杖というか動力を求めてであるが、今では、おおよそ、こう思うようになっていく。「諸行無常、なるようになる。人生に目的も、成功も、完成もない。ただ希望につながる何かがあればよい」と。もっとも「在日」である限りにおいては、やはり、「在日」であることの意味が人生の根幹に

書いている。「自分が現下に苛まれている苦しみが無意味なものであると判明したとき、人は絶望し、より深い苦しみに苛まれる。人間は意味を糧として生きる者であり、無意味には耐えられないからだ。苦痛に意味を与えてくれるのは信仰しかない。信仰とは、いつかは生きることの意味に到達できるのではないかと期待である。またその意味を求める欲求でもある。だが、それには果てがない。人は歴史からは解放されることがあるかも知れないが、内面の信仰には解放がない。信仰とは文字通り、無制限なものである」。

もちろんここには歴史意識とか記憶の問題がある。歴史意識が重要であることは今更述べる必要もないが、それは歴史の記憶と密接不可分なものである。「在日」といえば、犯罪、非行、貧困、家庭崩壊、自殺、アルコール・薬物依存、精神障害といった言葉が思い出される。それはたぶん強者からの見方という側面も強いであろう。そうした中で、記憶すること自体、忘却することに抗って、闘うこと、そのものであると思いたい。抗いつつ歴史の真実を記憶し、そこから人生を生きる意味を持ち続けること、それは簡単なことのように見えても、じつはきわめて難しいことではないかと、私自身いつも思っている。強制動員被害者の金景錫さんが日本鋼管を提訴したのは一九九一年九月、元日本軍「慰安婦」被害者の金学順さんが日本政府を

あるとは思っている。その場合、中立的な理論や客観性というものはない。近年多く指摘されているジェンダー平等の関連でみるなら、在日といっても男と女では違うし、男もさまざまである。自分自身のジェンダーの位置付けを問いなおし、可視化し、その歪みや痛みを明らかにする努力を怠るとき、在日論も、日本人論も、歴史認識の誤りなど、すべてが問題を孕むことになる。

「在日」であることの意味は、すでに述べたように、植民地被支配の経験、分断時代の受忍、そしてそこからくる祖国統一の希求だと言つてよい。もちろんそれは、人権や民主主義など、人類の普遍的な価値に連なっていくものである。『抗路』十一号に掲載した拙稿『在日』を考える——『宗教的なもの』と関わってで、それは宗教的信仰にも比せられる自分の生き方の根本であると述べた。少し格好良くすぎて自信はないが、だからといって否定はできない。運命をどう捉えるかは、間違いなく、信仰の問題と関わってくるはずである。何も神学的、宗教的な信仰だけに限定して言うのではない。信仰はつねに個的で実存的なものだと思つている。信仰はそれ自体、自分一人だけの物語であり、人生の運命を引き受けようとするものではないのか。

四方田犬彦は文学や映画を専攻し、宗教史に造詣が深く、朝鮮にも関心を持つ評論家であるが、『いまだ人生を語らず』（白水社、二〇二三年）の一節「信仰について」でこう

相手に訴訟を起こしたのは同年一二月、そしてそうした流れのなかで日本全国の市民サイドで「強制動員真相究明ネットワーク」が設立されたのは二〇〇五年七月。それらの時代の流れ、闘いは、私自身の内面奥深くでいつもズシンと疼いていた。

「在日」は一世の多くは零細自営業で辛苦をなめつくし、二世になつては親の期待を担って大学を出てそれなりの生活を営んだ者も少なくない。しかしそうした者も含め、多くはいまや職を退いたあと、所属や職責、肩書きなど、明確な帰属意識を持ちにくいまま、大阪や東京などの都市を中心に高齢者として張り付き始めている。依拠すべき家業も生業も定かではなく、多くの者は日本人に較べて低い年金に甘んじるしかない実状であり、日本人の地域活動に参画する術も少ない。

日本と韓国の意識構造はかなり違うようである。大胆に言うなら、日本は封建主義であり、韓国は官僚主義であると言つてよい。日本では上の人には忠誠を誓うが、韓国では最終権力者である王にのみ忠誠を誓う。つまり日本には親分・子分の関係が数多く存在するが、韓国はそうではない。日本には盆踊りやお祭り、町内会そして会社組織などがあつて権力組織に暗黙のうちに組み込まれている。そうした枠組みないし共同体といったものへの同調圧力がきわめて強く、そこから追い出され、あるいは外れることは恐

怖と不安の種となる。閉鎖的であるが、一見穏やかな意識構造とでも言うのか。それに対して韓国は開放的で、時に激しいとも言っているのか。そこにかつての植民地支配に起因する複雑な歴史意識とか生活意識、そして家族構成とかいったものが絡んでくる。「在日」はまさにその狭間に位置づいている。

今日、「在日」全体にとって、総連とか民団が現実にとれくらの影響力を持つているかは分かりにくい。ただ同胞の日常生活を見ると、総連系の人たちが朝鮮学校の歴史と同胞としての共同体意識をそれでも持っているのではと思える。囲碁とか山歩会、ノレ（歌）、料理などのグループ活動は総連系同胞のほうで活発で、民団系はほとんどないのではとも思われる。もつとも総連系といっても政治に関する話は聞かれず、総連とか民団という区別も実際には感じとられないのではないかと思われる。高齢者の問題は一般に、健康の問題、生活費の問題、孤独の問題が大きいはずである。そのどれにおいても、「在日」はより難しい立場におかれているのが実状だと思われる。八〇歳くらいになるとほとんど白内障の手術を受け、やがて認知症を患うようになっていくと言っている。



「民族」そしてたぶん「在日」という言葉は、ある意味、

的であり方がいったん指向されたとも言えなくもなく、二千年にわたって差別と偏見、迫害の対象とされてきたユダヤ人にもほのかな灯りがともるかのようであった。しかしこの啓蒙思想の普遍的人間理解は一九世紀に入るとたちまちにして、近代国家の形成とともに瓦解していった。「先進ヨーロッパ諸国」は国際的な通商や植民地経営に乗りだし、ヨーロッパのユダヤ人はふたたび新しいナシヨナリズムの餌食となつて、さまざまな迫害や差別を受けるようになった。もともとフランスの人権宣言やアメリカ合衆国の憲法権利章典には自由や平等の一般的な権利は明記されていたが、先住民や奴隷、女性その他の被抑圧者の人権については何も記されていないかった。ヨーロッパにおける民族国家の形成と成長はユダヤ人に何の利益もたらさず、ドイツのナチズムによる大虐殺に代表される悲惨な経験を重ねるしかなかった。ヨーロッパ千五百万のユダヤ人のうち六百万がガス室に消えた後になって、イスラエルという民族国家が実現するが、それは第二次大戦後のアジア・アフリカにおける新興独立国家の誕生という一時的な「進歩」があったとはいえず、歴史的には民族国家がやがて時代遅れのものとなつていくなかでの建国であった。見方によっては、入植者が先住民を追放するというイスラエル・パレスチナ間の葛藤・争乱であるが、それは今に至るまで激しさを増すばかりである。

愚直でありながら、今日ではいささか逸脱、狂気の気を帯びている。言葉がまっすぐである以上に、現実世界では、影深く、苦味のある響きを含んでいる。「在日」にとつての民族、国家の問題などと関連して、アイザック・ドイッチャーの『非ユダヤ的ユダヤ人』を読んでみた（鈴木一郎訳・訳者あとがき、岩波新書、一九七〇年、原著一九六八年）。ユダヤ人やイスラエル・パレスチナに関心を持つ人は必ず読む本だという。

ドイッチャー（一九〇七—一九六七年）はポーランド系ユダヤ人でトロツキーやスターリンの伝記を著したことで知られるマルクス主義歴史学者、ジャーナリスト、政治活動家であった。ユダヤ人でありながら「プロレタリア・インターナシヨナリズム」のスタンスを実践しようとし、生涯、ユダヤ人を超えて普遍的な人間になることを志向したという。ユダヤ人を超えて、つまり宗教や民族、国家を超えて普遍的な人間になろうとしたという、民族や国家にとらわれがちな日本人や「在日」からすると、非日本の日本人とか非在日的在日といった問いの立て方が頭に浮かんでくる。

一八世紀以降と云つてよからうか、人権や自由・平等といった啓蒙思想がヨーロッパで広まり、フランス革命（一七八九—一七九五年）をへて世界に波及していった。実際にフランス革命の人権宣言以後、理性にもとづく人間の普遍

ドイッチャーは、ユダヤ教の遺産を重要視しはしたが、「非ユダヤ的ユダヤ人」を自称したことからも分かるように、無神論者かつ終生社会主義者であらうとした。非ユダヤ的であらうとしたが、それでもその根底にはどこまでも、自身はユダヤ人であるという自覚があったと言える。そしてドイッチャーは生涯をかけて「インターナシヨナリズムの実現」を探し求めようとしたが、結果的には、その解決の鍵を見出せないままに世を去つたという。今日の世界がますます「国益」中心の民族と国家の枠組みを重視していく流れのなかにあつて、それに抗つてインターナシヨナリズムを追求し、普遍的な人間になろうとすることがどんなに困難なことか。

ドイッチャーに即して言うなら、ポーランド系ユダヤ人として運命的な人生を送る限りにおいては、ポーランドおよびユダヤという根源的な枠組みを乗り越えることはできなかったのではないかと思う。ドイッチャーは、ナシヨナリズムは革命的段階においてすら非論理的な色合いを持つもので、排他主義や国家的エゴイズムや民族的優越性を誇示する傾向を持つと喝破している。しかしまたドイッチャーは、それにもかかわらず、虐げられた民族のナシヨナリズムはそれなりの正当性を持つものであるとも言っている。実際、人は、出自や歴史に背いて生きることができないし、だからといって、それらに引きずられればなしというわけ